

經濟政策の基調

大 泉 行 雄

一、問題の所在

- i 經濟政策の基調に横はる二問題
- ii 本論文の範圍

二、科學と政策

- i 大西猪之介教授の説
- ii 坂西由藏氏の所論
- iii 異説の若干と批評
- iv 疑問の提出

三、左右田博士の「經濟政策の歸趣」

- i 經濟生活と先天的 Sollen
- ii 先天的 Sollen の性質

經濟政策の基調

iii 經濟政策の究極點

四、左右田博士說への一考察

- i 政策は全體を想定す
- ii 内容的制約の問題
- iii 政策の相對性

五、政策に於ける統一的脈理

- i 坂西氏所說の再考
- ii 經濟社會の進化
- iii 統一的脈理

一

茲に「經濟政策の基調」なる極めて廣汎なる課題を掲ぐることに依つて、筆者がそれに含まるべき問題の全領域を討究解明するものと解されてはならぬ。何故なれば、斯くの如き廣さと深さとに於て異常の研鑽と思索とを要求せらるゝ研究對象に就て、十全を期せんとすることは、現在の筆者の能力を遙かに超絶したる業たると共に、それは筆者の、向後永き研究對象として存在すべきもの

だからである。従つて此の一論に於ては、問題は自ら或る限定を加へられねばならぬ。

凡そ經濟政策の基調を究明せんとするに當り、吾等は先づ根底に於て、二個の考ふべき問題の發生するを認め之が解決を企てねばならぬ。其の一は、經濟政策が他の汎ゆる政策と相並んで政策と稱せらるゝ限り、政策そのものの本質如何てふ疑問に逢着せざるを得ざることは是である。即ち各種の政策は、それが施さるゝ對象及びそれが目標とする理想の差異に依つて、經濟政策、社會政策、政治政策その他各般の政策領域を分化せしむるけれども、何れも政策なる限り、そこに政策としての共通觀念が存在しなければならぬ。此の政策とは何ぞやとの本質研究が、如何なる政策に於ても先づ試みられなければならぬ第一行程と思はれる。其の二は、上述する所より進んで、特に經濟政策と特定せらるゝ時、夫れは經濟なる概念に依つて制約を被ることとなる。従つて、經濟政策の基調を明かならしめんには、經濟生活、經濟行爲、經濟組織と言ふが如き、究極に於て經濟とは何ぞやの問題を明白ならしむることが必要となつて来る。

斯くて、一方に政策一般の意義が明白になり、他方に經濟の意義が定立せらるゝ時、自ら其處に經濟政策の根本的意義即ち經濟政策の基調が闡明せらるゝこととなるのである。而も茲に我等が目して問題の第二となしたる、經濟なる概念そのものゝ本質を明かならしむることは、獨り經濟政策

の基調論に於て重要なるのみならず、否それよりも遙かに高き度に於て、經濟學に於ける基本問題である。經濟學者は自家の經濟論を披瀝するに當り、必ずや先づ經濟なる概念の説明に其の筆を起さざるはない。經濟政策は、此の如くにして經濟學が明かならしむる所の——或は明かならしめんとする所の——經濟概念を採つて以て其の基調の一石たらしめんと欲するものである。故に、經濟理論が經濟なる概念に就て、正鵠なる解釋を提供し居る限り、我等は聊かの躊躇と因循とを持つことなく、直ちに之を基底として經濟政策の基調の建設を試むることが可能となるの理である。然れども、今日經濟とは何ぞやの根本問題に對して未だ一般的に正當視せらるゝ觀念の存在することを聞き得ない。惟ふに之は、向後、幾多の論議と検討とを俟つて樹立せしめらるべき至難なる問題の一つであらう。斯く一般的に準據すべき經濟概念の存在せざることが、經濟政策理論に於ても常に先づ經濟概念の検討が試まるべき論議の一つを形造る所以である。

然乍、此の小論に於ては、寧ろ經濟純理が第一線に立つて觸れねばならぬ「經濟とは何ぞや」の課題に就て關說せんとはしない。此の點に筆者は問題の限定を有するものである。我等は今、例へばマーシャルに於ける經濟概念の如きを前提とし、之を讀者に豫定することによつて論を進め行くであらう。従つて、我等が茲に主として論究を企てんとするは、我等が所謂問題の第一である。再

言すれば、經濟政策が政策なる限り、其の基礎的觀念を成す政策一般の意義を考察せんとすること
是である。従つて、經濟政策の基調なる課題に向つての、全面的研究とはなり得ない恨を有つけれ
ども、苟くも經濟政策を考ふる人々の必ずや一度は顧みなければならぬ行程であると信ずる筆者
は、經濟政策論の前奏として考究すべき價值ありとなすものである。

二

獨り經濟政策に限らず、汎ゆる政策一般を通して其の本質を考察せんとする時、先づ提出せらる
ゝ問題は科學と政策との對立之である。學者は屢々之を論じて、二者全く其の平面を異にすべきも
の、従つて之を峻別せざるべからずとなす。我等は其の適例を大西猪之介氏の「囚はれたる經濟學」
前篇に見出す（大西猪之介全集、第一卷に收録さる）。故大西教授が自ら消極的研究と銘したる「囚
はれたる經濟學」前篇は、古今の經濟學說を捕へて説き來り説き去り、而も批判の高處より夫れが
囚はれたる所以を明かならしめんと企てられたるものである。それは先づ希臘、羅馬の概觀より中
世手工業時代を一瞥し、宗教革命を経て經濟學の生誕に至り、正統學派の批判より轉じて社會主義
を評し、最後に歴史學派の檢討に及んで止む。少しく故人がシユモラーを評した口吻を借るれば、

古今の經濟學說を紹介批判して筆端陸離、寔に興味の津々として盡きざるものあるを覺ゆると言へやう。教授の筆端一たび歷史學派の批判に移る時、凡そ二個の立場より之が筆誅を加へられる。一は歷史學派が歷史偏重の餘り歷史に囚はれたりてふ事實、二は之にも優つて重大なる科學と政策との混淆即ち之である。茲に於て我等は、科學と政策に對する教授の極めて峻嚴なる區別を認め得るのである。謂へらく、

必ずしも經濟政策と限らず、あらゆる政策は皆此の現實より出發して、後の理想に向つて架せられたる橋梁なり。科學は一定の目的を達するに、如何なる手段を採るべきかを決定し得れども、人の社會生活の理想相分るゝに當り、其の何れを取り、何れを捨つべきかを決定するの能力を有たず。一定の理想を抱くは之を價值ありと認むるがためなるも、何を價值ありと認むるかは、智識の問題にあらずして信仰の問題、客觀的事實に非ずして主觀的判断なればなり。換言すれば、主觀的價值判断は科學の問題にはあらず。人の抱く理想とは彼が至上の價值を認むる對象を言ふ。而して如何なる對象に幾許の價值を置くかは、世にも稀に個別的なる各人の人生觀、世界觀に基くものなり。されば一切の理想は主觀的たるべく、又主觀的たる外ある可からず。

科學は賞罰を下す權能なく、一定の行動を命ずる能力なし。「主張せず、提案せず唯説明す」と言

ふ、是その本分なり。若し經濟政策てふ一科の學を設けんと欲せば、其は只何故に或る團體或る時代は或る政策を奉じ、他の時代他の團體は又他の政策を信じたるか、如何なる政策は如何なる結果を齎したるか、又齎しつゝあるかといふ客觀的疑問の解決を其の存在の理由となさざる可からず。

若し國民の一部に限らず、將世界の一隅に偏せず、萬民を通じて信奉せらるゝ永久不變の理想なるもの存在すべくんば、之を目的として建設せられたる政策論は、或は以て確乎不動なる學理となるを得ん。然るに幸か不幸か吾人は未だ這般政策論の前提たる普遍妥當の理想を有し得ざるを奈何せん云々と（大西猪之介全集、第一卷、經濟學認識論。五七、六一、六三、六四、六八頁參照）。

科學の名に於て政策を云々することを蛇蝎視し、科學に歸すべからざる負擔を歸せしむることを排撃する敎授の立場は、坂西由藏氏の名篇「經濟的文化發達の道程に於ける二傾向」に相通ふものあるを覺ゆる。我等は後段坂西氏の所説に觸るゝ機會を有するが故に、茲に豫め其の要旨を伺ひおかんと思ふ。

「經濟生活の歴史的考察」なる一卷の首篇を形成する右の論文は、坂西氏の學問的立場を最も端的に表明する所の重大なる一篇である。氏に従へば、或る時代に於て一般的に要求せらるゝ思想は、其の特殊なる時代を前提としてのみ肯定せらるべきものであつて、之を永久不易なる思想と考ふべ

きではない。學問的立場に立ちて見る時、吾等は人類進化の永遠の理想なるものを定め得べきものではなく、寧ろ文化發達の道程に對して、何等の理想をも有し得ないものである。されば學問研究者としての吾等に問題となるは、人類文化の發達が如何なる方向に向つて進み來たりしか、その發達の道程上に如何なる傾向が現はれ居るやの點であつて、人類發達の將來的境地如何は問題となり得ないのである。人類文化發達の極致は何であるかといふことは、學問的認識の外に在りとの斷案が從つて下される。然るに吾々は社會上の問題に就き、屢々現實を無視して、先づ何等かの理想を立て、之に依つて見解を示さんとする者多きを見る。去乍、個人が各自に理想を立て以て立論を試むることは極めて容易な事ではあるが、又誤謬に陷ることを少なしとせぬ。經濟政策に於て殊に其の弊の著るしきを見る。されば吾人のなすべき所は、現實的歴史的研究に依つて人類社會進化の傾向を見出し、此の自然的發達の趨勢に追従すべきことである。總べて新らしき社會並に思想は、現在の社會並に思想よりのみ生れ出ずべきものであつて、忽然として天上より降下すべきものではない。總べては絶えざる進化の連鎖に外ならないからである。故に新らたなる社會は理想によつて作り出さるゝものではない。然らば文化發達の道程及び傾向は如何なるものなりや。坂西氏は之に就きて研究を進められて曰く、經濟的文化の發達とは、經濟生活上に於ける勞働集約の程度

増進の過程なりと。而して勞働集約の過程は、一方に於て民族と民族との間に見出さるゝと共に、他方に於て又一民族内部に於ても之が認められる。茲に勞働集約程度の増進とは、與へられたる自然條件の上に益々多量の勞働力が加へらるゝこと、即ち自然條件に對して人工が一層多く用ひらるゝことを意味する。

然らば文化發達の手段は何なりや。曰くそれは個性の發達である。此の個性の發達に基き、個性が全能力を發揮せしむる上に於て二個の傾向を示すに至つた。一は分化であり、二は平準化の傾向である。歴史を通じて見る時、社會進化の道程は何れも分化と平準化との交互作用によつて促され來たつたものに外ならぬ。現代社會に於て叫ばるゝデモクラティックな思想も、之資本主義の極端なる分化傾向に對する平準化としてのみ認めらるべきものである。現在の社會が永久に其のまゝ持續さるべしとは考へ得ざる所であるが、之が進化するに當つては、何等かの分化作用即ち不平等の發生によつてのみなさるゝことを信じなければならぬ。而して此の來たるべき不平等が何なりやは吾等の豫見し得ざる所である。斯く論じ終る坂西氏は、學問研究者としての嚴正中立的立場を支持せんとするものなのである。

上來紹述したる二論を對比することによつて、吾等は、科學認識の峻嚴性を擁護し、之に森嚴不

可侵なる世界を樹立せしめんとする所に二者相通ずるものあるを認め得たであらう。筆者も亦科學が「存在の理法」を究明せんとするに對し、政策は「當爲の理法」を仰望するものであり、科學の名に於て、濫りに政策の分野に君臨すべからざることに吝かなるものではない。此の場合謂ふ所の科學が、獨り自然科學のみに限られず、所謂文化科學又は歴史科學をも包含したる科學一般を意味すべきことは、ヴァインデルバンド及びリツケルトの二科學對立を得たる今日に於て改めて附言するの要もないことであらう。それにも不拘、筆者が特に此の事實に注意を促さんとする所以のものは、世の論者の中に、科學と政策との峻別を探らず、或はザイン (Sein) とゾルレン (Sollen) の本質的差別を無視せんとする人々の存在することに依る。科學と政策との峻別に疑問を抱懷し、かゝる嚴正なる區別を不當と非議する論者は次の如くに主張する。科學の目的は單に存在の世界を描出するに止るものではない。存在の世界を描出せんとすれば、必然な存在理由の世界に侵入せざるを得ぬものである。従つて科學と政策とは、各々その目的を異にするものではなく、究極に於ては同一の世界を想定するものに外ならないのであると（註一）。此の如き議論に對しては、一應之を肯定することが出来る。但し、その場合には、獨り科學と政策に限らず、人事の萬象は總べて人間生活に何等かの關係ありとの最も廣い立場に立つことを必要とする。蓋し人事の汎ゆる現象は、何れも人

間に發して人間に歸へり來たるべきものであり、人間の頭腦の生産たる汎ゆる事象は人間を離れて存在し得ないからである。斯くては獨り科學に限らず如何なるものも存在理由を豫定せざるもの一もなしと云ひ得るに違ひない。存在理由を論者の意味する如く、人間生活に對して有する意味と解する限り、人事間の事象一として、人間生活に對して意味なきものは無い。極端なる場合を例ふれば、人間生活を破壊すべき思想すら、猶消極的意味に於て——即ち之に對立する健全なる思想を對比によつてヨリ明瞭ならしめる點に於て——存在理由を有つとさへ言ひ得ることになる。科學と政策とを區別せんとするは、科學が人類生活に對して意味を有たずとなすものではない。唯、如何なる存在理由を豫定する事實と雖も、之を科學の對象として觀察せんとする時は、吾等は存在理由それ自身をも客觀的事實として認識するだけに満足せねばならぬと言ふのである。従つて、科學的認識としては、存在理由そのものが、既に當爲の性質をはなれて、一個の事實として觀察せられねばならぬと云ふのである。政策は將來的世界への仰望であり、價值判斷それ自體を稱するものであるから、之は既に科學の領域を越へたる別個の範圍と云はれねばならぬのである。科學と政策との區別とは、右の如きものであつて、科學が人類生活に交渉なしといふが如き獨斷をなすものではないのである。

Sein へ Sollen との本質的差別を無視せんとする論者は又曰く、事實^{ザイン}の研究に於て發見せられたる因果律的準則は、之を能動の形に於て未來に延長せるものが即ち當爲^{ゾルレン}である。一つの因果律よりは、「之を發生せしめんとすれば斯くすべし、之を發生せしめざらんとすれば斯くすべからず」との當爲を生ず。その何れを撰ぶべきかは政策學全體の指導的原理によらねばならぬ。而して此の指導的原理たるや、部分的には既に事實^{ザイン}の研究に際しても、價值判斷の基準として有意識的又は無意識的に現はれたるものである。斯く觀ずる時は、政策學に於て論議せらるゝ事實と當爲とは何等脈絡相通ぜざる別世界にあらずして、程度の差こそあれ、兩者共に吾人の價值判斷の篩に掛けられたるものである。那須皓氏の著「經濟政策學原理」第一卷の立場が即ち之である。

右の如き論者の立論に對しては、筆者は必ずしも一つに限らざる疑問を有するものであるが（例へば註二を參照）、今他の諸點を無視して、事實と當爲との程度の關係のみに限つて觀れば、論者の立場は自然科學に對する文化科學の特質を認識し、文化科學に於ける先天的視範を一般的文化價值に求め、此の先天的形式たる文化價值に係はらしめて文化科學が成立する時、其處に自ら價值判斷なかるべからざれば、事實^{ザイン}の認識と當爲^{ゾルレン}とは別異の平面にあらずして、同一平面上に在りとなすものであらう。先天的規範たる一般的文化價值に係はらしめることは、即ち價值判斷を意味するも

のなりとの立論を限つて見れば、之はリッケルトに對するリールの非難の立場ではないか。そして夫れに對しては、既に左右田博士の明快なる批判が下されて居る。（左右田喜一郎、經濟哲學の諸問題、一三六頁）。筆者はリッケルトの論理的立場に據つて、歴史が先天的形成たる一般的文化價值に關係して、そこに歴史科學の認識の成立すること、實際上、事物の價值判斷を試むことは、別個の世界なりと考ふるものである。左右田博士の説かるゝ如く、一般的文化價值に係はらしめることは、心理的には價值判斷と分つこと不可能なるべきを認めても、此の如くにして、吾人に興味ありとせらるゝ歴史的事實が客觀的に認識せらるゝことは可能であり、其處に科學としての歴史が成立せしめられ得るではないか。されば、その場合心理的に用ひられたる價值判斷も亦、一つのザインとして觀察し得るのではないか。價值に係はらしめること、或は進んで價值判斷を試みたる其のことが、客觀化せらるゝ所に歴史科學は成立せしめられるのではないか。ザインデルバンドの所謂個性記述的 (Idiographisch) なる歴史科學の中に、尙法則定立の餘地を或る程度まで許さんとするが如き立場は、筆者の所謂客觀化と稍々相通ふ意味を認め得ざるか。

然るに政策そのものは、此の如き客觀化にはあらずして、當爲に向つて接近せんとする努力そのものに外ならぬ。されば論者が、經濟政策學に於て論議せらるゝザインとゾルレンとは何等脈絡相

通ざる別世界の二物にあらずと言ふも、既に學としての觀點に立ちたる限り、その場合のゾルレンは一個のザインとして觀察せらるゝ外途なきものであることに注目しなければならぬ。斯く論ずれば、經濟政策學に於てザインとゾルレンとを別世界と分つといふことは、そのこと自體が不合理であつて、恐らく、科學と政策との峻別を採る人と雖も、學の中にザインとゾルレンとを包含せしむるが如き矛盾を敢てする人はないであらう。學の中に於て認識の對象となれるゾルレンは其の性質に於て既にザインに外ならぬ。何となれば、斯かるゾルレンは、現實生活に向つて價值判斷の規準たるべき當爲そのものではないからである（註二）。

吾等は行論を一段進める。曩に觸れたる大西教授の政策觀に在つては、總べて政策は世にも稀に個別的なる各人の人生觀、世界觀に基くものなれば、一人が左を指さんとするに對し、他が右を指さんとするも、之を判斷して一般的に一を是とし他を非とするが如き、或は一を當れりとし他を誤てりとなすが如きは能ふべからずとなす。斯くて政策は、純然たる主觀的領域の中に押しやられ終るのである。筆者の問題は、右の如く故教授によつて押しやられたる問題を再び採つて檢覈せんとする所に發する。吾等が現實に生活を營む時——社會なる共同生活體を形成して社會生活を營む時——吾等の經濟生活に於ける全體意志の支配は、獨り個人又は一部團體の主觀によつてのみなさる

べきものなりや。又斯くなさるゝの外全く何等の一般的規準も認め得ざるや。夫々の國民、民族及び時代に特殊なる政策を通觀して、その間に猶一般的なる傾向の存在するものを認め得ざるや。固より我等は、かゝる傾向を歴史の間に發見し得たりとするも、之を科學の名に於て將來に延長することは慎むであらう。然し、科學をはなれて、現實生活に於ける政策自體として、吾等は尙それを採つて一般的標幟とはなし得ないであらうか。政策は全く個別的なる人生觀なりとて抛擲すれば、吾等の將來的現實生活は或は行手なき旅程の如きものとなる怖れなきか。人が孤立的生存を營まずして社會生活を経營する時、社會てふ全體従つて又夫れが有つ全體意志の歸趣は全く存在しないのであるか。或る一つの時代には肯定せられたる政策が、他の時代には否定せられ退けられたる事實に向つて、そは時代々々の人々の人生觀の差異に依るとのみ單純に一蹴して吾等は満足し得るか。吾等は其の事實の間に尙、人間生活進化の傾向として何物かを求めんとは欲せざるか。而して若し之が求め得られたりとすれば、之を以て將來的政策それ自體の標幟となさんとするの要求を感ぜざるや。

イエス命じてヨハネに告げしむ「盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へられ、貧しき者は福音を聞かせらる。おほよそ我れに蹟かぬ者は幸福なり」と（馬太傳、

十一ノ五、六）。此の一節を顧みて筆者は寔に痛感を覺ゆる。何となれば、故教授が押しやられたる政策理論を取上げて、之を再び眺めんとするは正しく教授に蹟くものだからである。おほよそ我れに蹟かぬものは幸福なりと示されたる教授に蹟く筆者は、惟ふに不幸であり災ひを有たねばならぬかも知れぬ。その危険を意識しつつも、吾等は一たび踏み入りたる思索の野は、之を何處までも究め行かんとする内面的要求を有つ。斯くして、何處へか——假令正しからざる結論にせよ——何處へか到達し得たる曉には、吾等は其處に立つて、吾等の地位を知り、我等の企ての何なりしかを全部的に悟り得るであらう。而して又、かくすることによつて、獨り拱手思ひ惑ふた時よりも、ヨリ良く問題への何等かの暗示を與へ得らるゝであらう。

（註一） 川西正鑑、理論經濟學の若干問題、二—三頁

（註二） 那須皓氏に於ける Sein と Sollen との關係説明に對しては、筆者は本文に於て試みたる批評の外に尙重大なる批評を有つと信ずる。それ等に對しては、筆者は猶充分なる考察を他日に期せんとするものであるが、今一例を示せば、本文に示したる「事實と當爲とは何等脈絡相通ぜざる別世界の二物にあらずして、程度の差こそあれ、兩者共に吾人の價值判斷の範疇に掛けられたものである」（須那皓、經濟政策學原理、第一卷、六頁）との一節の如き之である。著者は右一節に續いて直ちに、自家の見解を立證するための資として左右田博士の言葉 Sollen はそれ自身として Sein に一定の方向を與ふるもの、即ち Sien を可能ならしむるもの兼て Sein の極限概念を示すものである」（左右田喜一郎、文化價值と極限概念、二八一頁）を援用する。

然し筆者を以てすれば、左右田博士の所謂 Sollen と那須氏に理解せられたる右の如き Sollen とは甚だしく異なる概念と思はれる。左右田博士のそれは、先天的形式としての Sollen であつて、之に係はらしめて歴史が科學として認識せられ、又之に照し合して政策が方向を與へられるが、決して共に吾人の價值判斷の篩ひに掛けられたものではないのである。價值判斷を可能ならしむる先天的形式が何故に吾人の價值判斷の篩ひにかけられ得るのであらうか。「洵に意味深長なり」とて引用せられたる左右田博士の右の一節を、博士は果して首肯せらるゝや。將又筆者の博士を解するこのに至らざるか。

科學と政策との峻別は、福田德三博士、改定經濟學講義第一卷（大正四年）、二二三—二二七頁にも詳論せられ居れば参照せらるべし。

三

政策は個別的なる主觀に基けば、その間に普遍的なる理想を見出して之を永劫不易なる標幟となすこと能はずとの論斷に躓いて、その間に猶何物かの存在するものなきやと思ひ惑ふ我等の態度に、一條の閃光をひらめかせて我等の行論の行手に多大の光明を與ふるものは、實に左右田博士の政策觀である。左右田博士の名著「經濟哲學の諸問題」を成す一篇「經濟政策の歸趣」は苟くも政策の本質を探らんとする者の、忘るべからざる一篇と云はねばならない。此の論篇に於ける博士の立場は、他の場合に於けると變らざる嚴正なる經濟哲學の論理的立場を支持せらるる。否、博士

にとりては、經濟政策の歸趣如何てふ問題自體が、經濟哲學の最終問題と相通ふものなのである。今博士の論旨を甚だしく誤解することなく要約し得たりとすれば、凡そ次の諸點に歸着せしめ得ると信ずる。

經濟政策とは、經濟生活をして或る一定の方向をとらしめ、其の究極に於て、或る特定の結果を生ぜしむべき意識的努力を稱す。從ひて、經濟政策の歸趣なる問題は必然的に經濟生活の歸趣なる經濟哲學の問題とならざるを得ざるものである。

經濟生活とは經濟なる歴史的範疇に制約せらるゝことより、當然歴史生活として認識せらるゝ。此の點、リツケルトが經濟學を以て、同時に自然科學と歴史との對象たり得るとなす不鮮明と不徹底とを退けて博士は明確なる斷案を下されのである。經濟生活は歴史生活の一面的解釋である。而して、歴史生活が認識對象となるは「與へられたるものとして」全く客觀的に「其が實際に在りし如く」認識せらるゝものではなく、一定の先天的 Sollen に係はつて歴史生活として認識せらるる。されば經濟生活を可能ならしむる根基は此の先天的 Sollen —— 經濟的文化價值 —— であると論定せらるゝ。

然らば、歴史生活認識の先天的條件たる Sollen は如何なる性質を有するや。其の特質は、常に

必ず形式的にして、決して内容的制約を許さざることは是である。此の點博士の極力論辯に勉めらるる所であり、全篇を通じて重大なる核心の一を成すものと見らるゝ。蓋し先天的 *Sollen* に何等かの内容的制約を與ふる時は、直に「何に對して然るか」との反問を生じ、此の反問に答へ得れば再び「何に對して然るか」との反問となり、斯くの如くして推論を進め行けば、遂には先天的形式規範たる *Sollen* 即ち一般的文化價值に到達するの外ないからである。之に反して、此の先天的形式規範に向つて、何等かの制約を試みるとすれば、必ずや失敗に終らざるを得ない。過去に於ても、亦將來に在つても、先天的規範制約の試みは幾たびか繰返へされ、又繰返へされるであらうけれども、それは史實が失敗を實證せるものであり、又將來に於ても失敗に歸するものであらう。

斯くて、一般的文化價值に係はつて歴史生活が認識の對象として可能となり、而して又一般的文化價值に照し合されて實際的に價值判斷のある所に、政策の根基が存在する。歴史生活は此の一般的文化價值を内容的に實現せんとする道程の一切であり、最廣義に解されたる社會政策——人類歴史生活に對する政策といふが如き——斯かる文化價值の内容的實現に對する意識的努力に外ならぬ。されば又經濟生活とは、經濟的文化價值たる形式規範の内容的實現過程であり、此の規範實現の過程に或る特定の方向を與へ、或る特定の結果を生ぜしめんとする要求に對應する意識的努力を

稱して經濟政策となすのである。此の故に、經濟政策究極の歸趣は、規範實現の内容が、客觀的普遍的妥當性を有すべしとし又有する所である。勿論、歴史生活の完成は階段的であれば、普遍的客觀的妥當なる内容はなく、それ故に又永久に過程が進行する。但、究極に於て規範實現の内容が客觀的妥當性を具有すべしとする謂は、形而上學的要求と信念とがあつて、規範實現の全過程に意味を有つのである。

規範の内容が普遍的妥當性を具有すべしとの要求は、規範それ自身が既に吾等に必然的に起らざるを得ざる而も到底解明することを得ざる問題である。Kant にならへば、それは Idee であり、統制的原理 (Regulatives prinzip) である。

かくして左右田博士に在りては、經濟政策の歸趣なる問題は「認識の對象として、絶對的に不可能であり乍ら、尙且一種の實在として所謂 “ein Sein des Sollens” と云ふやうなものを考ふること」なきを得ない境地まで究明せらるゝ。之等は而して同時に經濟哲學の最終問題を成すものに外ならぬのである。

左右田博士によりて與へられたる、歴史生活認識への先天的規範の存在と、之が客觀的普遍妥當性を有するがためには内容的制約を許さざることの論理的歸結に對しては、惟ふに何びとも之を肯

定しなければならぬ所であらう。人間生活の現實なる經營者として、その現實的行動を實現せんとする時、如何なる具象的標識を規準とするにせよ、究極に於て普遍的なる規範の存在を想定せざるを得ないからである。之なくしては、人間生活自體の意義が全然滅却せしめられると云はねばならない。然るに斯かる究極的規範は、内容的制約を許さざるものである。左右田博士の語を以てすれば *ein Sein des Sollens* とも稱すべきものであるが、此の特別なる *Sein* を認識の對象として内容を求むることは不可能のことに屬す。是に於てか筆者にとつて考ふべき問題が提出せらるる。此の如き、内容的制約を許さざる失天的形式 *Sollens* が、政策の根基として想定せられねばならぬ時、現實生活——政策そのもの——の響導者たる規範は、如何なる機能によつて其の響導をなすや。内容的制約を施すことは即ちその客觀的普遍性を失はしめて、之を地に墜さしむる策である。然れども、現實の政策それ自體として、我等は果して内容的制約を施さずして止み得るか。認識の對象とはなり得ざる先天的規範が、吾等の刻々なる生活そのものを、事實的に支配し響導するものとして顯現し得るか。左右田博士に於ける政策の大乘を、移して直ちに生活自體を指導し得るか。筆者の問題とは即ち之である。

斯かる問題を提出する筆者は、再び左右田博士に躓くものなりと稱せらるべきであらうか。

（註）茲に「政策そのもの」又は「政策それ自體」と稱するは、科學的認識對象としての政策に非ずして、現實の生活に於ける現實的、從つて將來に向つて顯現せらるべき政策自身を言ふ。學的觀察に於ける政策ではなくて、現實生活に於ける政策を意味する。

四

歴史生活とは、一般的文化價值の内容的實現過程一切を指稱し、而して汎ゆる政策は、斯かる文化價值の内容的實現に對する意識的努力であり、之が經濟生活に顯現せしめらるゝ時、經濟政策ありとせらるゝ左右田博士の所説は、我等も之に歸服し肯定せんと欲する。然れども、經濟的文化價值の内容的實現に對する意識的努力を、何等の制限なく直ちに經濟政策と稱することは、若干意義の明確を失ふものではあるまいか。筆者を以てすれば、政策は常に何等かの形に於ける全體を前提としてのみ成立し得る。從つて又何等かの形に於ける全體意志を想定しなければならぬ。固より此の場合全體又は全體意志といふも、之が歴史的に觀て常に、今日一般に意識せらるゝが如き有機的統一體としての全體意識が存在し、從つて今日に於けるが如き統一觀念としての全體意志が存在したりと臆斷するものではない。國家又は社會といふが如き全體觀念は、國家及び社會の進化と共に漸次明瞭に意識せられてきた觀念であるから、その進化の低き時代に在つては、明確なる全體意

志への意識は之を認め難しと云はねばならないからである。然乍、如何なる未發達の社會又は國家に在りても、そこに政策の行はれたるものありと云はるゝがためには、何等かの形式に於ける全體——それが正當なる統一的有機體たると、將全體の名を僭稱する部分なるとを問はず——が存在しなければならぬと思はれる。社會なる意識が未だ自覺的になり得なかつた時代に在つては、全體と意識せられたものは、主として國家であり、更に溯つては都府であつた。然し此の場合に於ても、國家又は都府が今日見るが如き政治的統一體として意識せられたる制度なりとは稱し得ないものである。それは屢々一個人又は少數個人の專斷に任ぜられ、従つて國家の名を僭稱したる部分に外ならなかつた場合が多い。故に斯かる場合には正當なる意味に於ける全體觀念が其の時代に在つたとは稱し得ないけれども、而も猶その場合に於ても、政策ありとすれば、それは國家の名に於て、即ち全體の名に於て行はれたものなのである。別言すれば、常に必ず政策者と、被政策者との對立に於て行はれたのである。或は又常に必ず被治者全體といふが如き全體觀念——極めて粗撲乍ら——を豫定して行はれ得たのである。部分を以て全體を僭稱することは、固より我等が意味する正當なる全體觀念ではあり得ない。然乍、筆者の理解する政策とは、部分が部分の名に於て、獨り部分のためにのみなす行動を稱するものではない。政策たり得るがためには、部落、集團、莊園、國家、

社會その他何等かの全體を想定せずしては之たり得ないと云ふのである。されば、部分を以て全體を装ひ、其處に政策を發動せしめんとする時、部分を全體と一般的に信ぜしめ、民衆を眩惑せんとする詭計が往々にして行はれたること史實の證する所である。國王なる部分を以て國家なる全體と同一視せしめんとする詐術を遂行せんが爲めに、國王神權説を持ち來たり、國王之れを欲するが故に其の事は適法なりと稱し、遂には朕即ち國家なりといふが如き獨斷を敢てしたる佛蘭西國王の如きは最もよき實證の一つではないか。

されば、その意義と實質とには、今日のそれに比して天壤も雷ならぬ懸隔があり、又正當と不當との差別が存するとするも、政策の成立には必ずや全體なるものが想定せられねばならぬことを知る。而して、若し之を想定することなければ、個々人の自由なる行動と雖も、文化價值を實現せんとする意識的努力の存在する限り、何れも皆政策なりと云はねばならない。斯くては、理想追求に於ける人間行動の一切は、即ち政策なりと稱さねばならぬこととなる。此の如きは、或は言葉の争ひに終らんとするの危険あることは之を自覺するけれども、事實我等が政策と稱するは、個々人の理想追求行動を總べての稱するものであらうか。私は言下に否と答へる。かくして私には、政策の成立に就て、常に何等かの形の全體を想定せざるを得ぬこととなるのである。

歴史上に見らるゝが如き不完全なる全體觀念を離れ、今日の進化せる社會を前提として政策の觀念を求むれば、筆者は左の如くに之を理解せんと欲する。協同生存を經營せんとする人間生活は、そこに社會を形成する。社會は、之が進化したる形式に於ては、個々の因素たる部分を離れて獨立なる全體と意識せられねばならぬ。意味する所は、單なる個人の集合體ではなくて、集團の上に浮び出でたる一個獨立なる有機的組織體と認識せられねばならぬと云ふのである。従つて又其處には、有機的組織體が有つべき意志の存在するものなければならぬ。筆者の意味する正當なる全體意志が即ち之である。此の全體意志が、一般的理想を旗幟とし、之に向つて全體の方向を定め、全體を形成する部分の生活をば従つて又方向づけ、引上げんとする所に始めて政策が成立するのである。かくして政策は、全體意志の標識とする理想に向つて、接近せんとする意識的努力に外ならぬ。而して此の理想の本質を究極まで追求し行く時には、吾等は左右田博士と共に一般的文化價值なる先天的規範の高さにまで達しなければならぬのである。

問題は是に至つて、更に追討せられねばならぬ。先天的規範が内容的制約を許さざる時、之が現實生活に於ける政策の標幟となり得るがためには、何等かの過程を必要とせざるや。全體意志が意識したる理想に向つての、意識的努力行程をば政策と稱する時、その意識せらるべき理想は、内容

的制約を許さざる一般的文化價值それ自身で足り得るや。筆者は之に對して尠なからぬ疑問を抱懷する。

寔に左右田博士の説かるゝ如く、其の性質上、普遍的妥當性を得能はざる所の内容を以て、規範の認識對象となさんとする試みは、古往今來其の跡を絶たざるにも拘らず、何れも皆失敗の歴史を残すのみである。然乍、經濟政策の史的展開を試むる時、一つの政策失墜して他の政策之に繼ぎ、甲去り乙來たりて興亡隆替、そゞろに人の目を眩惑するの感あるけれども、此の如き政策興亡の事實は之を以て直ちに總べてが失敗に終りたりと稱し得べきものなりや。惟ふに夫れは失敗なる評語の當らざる失敗ではあるまいか。否更に論ずれば失敗とは稱すべからざる、進化の一段階ではあるまいか。一つの時代に一つの政策の存在したのは、その時代にとつては夫れが必要なりしがためであり、そうすることが必然的な進化の過程であつた場合が多い。されば、他の時代に、他の政策によつて代はられたりとするも、それは既に自己の役割を果し終つて、その存在理由を失つたがためではないか。失敗なる名にふさはしからざる失敗とは此の故である。而して、此の如く左右田博士の所謂失敗に歸すべき規範制約を、過去の總べての時代に於て繰り返へし來つた所以は何處に在るか。私は之を次の如くに解する。

論理上、客觀的妥當性を支持せんとすれば、内容的制約を許すべからざる先天的規範が、現實政策の規範として齎らざるゝ時には、常に内容制約を必要とせられねばならぬものである。之は謂はゞ人間の社會生活夫れ自體に含まるゝ傾向とも見るべきものである。現實生活に向つての政策は、何等かの具象的理想——規範の内容制約——を以てするにあらざれば、生活の嚮導者とはなり得ないのである。政策の相對性又は特殊性と筆者が名附くる事實が、嚴然として存在することを認めねばならぬ。政策は總べて相對性を有つ。普遍的妥當の要求を一般的文化價值に求め乍ら、生活の現實に於ける嚮導者としては何等かの制約を試まれねばならない。制約を試むことは普遍性を奪つて特殊的、相對的たらしむることである。現實生活への政策としては、我等は然かせしむるより他に術を有たないものである。それは究極に於て人間生活そのものが内に有つ不完全性とも云はねばならぬのであらう。

此の事實は明敏なる左右田博士の決して看過せらるゝ所ではない。即ち曩にも紹述せる「歴史生活の完成は階段的であれば、普遍的客觀的妥當なる内容はなく、それ故に又永久に過程は進行する」との一節は、明かに筆者の力説せんとする所と相通ふものである。唯筆者に在りて力點の存する所は、先天的規範が論理上内容的制約を許さゝると同じ程度に、政策の現實上規範は内容的制約を必

然的に必要とする事實を重要視せんとするに在る。換言すれば、論理的に可能なる先天的規範は、實踐上普遍的絶對性を有たしめること不可能なりといふ點に在る。

今類推によつて我等が言はんとする所を、更に明瞭ならしむることを許さるゝならば、筆者は神の問題を究明せんとする時に、或る人々の採る態度に之を借り來たることが出來ると思ふ。斯かる人々は、神の理念を以て全一なるものとし、之を説明によつて表明し得べき性質のものにはあらずとなす。神なるもの有ることなしと云ふ時には、既に神は存在する。何となれば、神の觀念を持たずして之を否定することは全く不可能だからである。然れども、「神とは何ぞや」の問に對し、之を何等かの形に於て說かんとすれば既にそれは神ではない。神は説き得ざる全一そのものであれば、之を口にする時には、最早神そのものではあり得ないからである。（例へば柳宗悅氏の神の問題に關する所論を觀らるべし。今手許に藏書なければ正確なる引用を許さず）。誠に斯かる人々の說かるゝ如く、神は全一なるもの其のものなれば、之を説明に移す時は、既に相對界への墜落となつて神そのものではあり得ない。それにも不拘、人は常に神を説明せんとて不斷の努力をなす所以は何處に在るか。説明し得べからざるものを説明せざれば止まれざる要求に、人間自體の不完性があり、人間と神との乖離があると私は信ずる。皮肉に解すれば、神は説明すること能はずとなす人

自身が、説明すべからずとの説明を與へて居るとも云はれやう。而して神を説明せんとする時、之に附與する性能は、人間の人格に於て經驗的に認められる徳性の極致に外ならぬ。人間に於ける徳又は善の極致を想定し、之を通して神を觀んとすることは、既に神を説明することであつて神そのものではあり得ないが、我等は然かくするの外に途を有たない。例ふれば、神の姿の具現を試むる工藝美術家も、その姿をば人間が想像し得らるゝ限りに於ける最も優美にして典雅なる人の姿態を通してのみ之を求めんと欲する。之以上を求むることは人間の果を超絶した能力だからである。

移して以て我等の政策本質論を説明し得るではないか。内容的制約を許さざる先天的規範の認識は恰も全一なる神そのものゝ認識である。それが實踐的規範たるがためには内容的制約を必然的とせらるゝは、恰も神の性能を推すに人間に於ける性能を通して見るの外途なきが如きである。

政策は相對的ならざるべからざることを上述し、それは究極に於て人間の社會的生活自體が、内に有する傾向なることを説き來たつた。然らば社會的生活は何故に斯かる傾向を有するや。蓋し曩に説けるが如く、政策は全體意志の向はんとする理想への道程である。此の全體意志は一つの社會生活を前提とする全體を背景とし、かゝる特定の社會生活に其の方向と歸趣とを與へんとするものである。従つて其の理想は又その特定なる社會生活を前提としたる理想である。此の故に若し特定

の社會生活が進化し又は改變せられて内容を變化するに至る時は、曩に存在理由を有した社會理想は之を失つて、新らたなる理想が示されねばならぬ。此の如く政策は常に特定せる社會生活を前提として成立せしめられる事實が、即ち政策自體に相對性を具有せしむる所以である。

論じて茲に至れば或は反問して云ふ人のあるであらう。政策は相對的性質を有すとすれば、それは時代と民族によつて異なるべきものである。斯くては、夫々の時代、民族が理想とすべき所を異にするに従つて千差萬別となるものなれば、その間に何等の統一的脈理も存し得ない理ではないか。斯くては又、大西教授の所謂、政策は世にも稀に個別的なる各人の人生觀、世界觀によるとなすとは隔ること正に一步の近きに在るの説ではないかと。吾等は然乍ら、上述する所のみを以て、吾等の論議を竭くしたりとなすものではない。筆者は政策を學として觀察する時、本來相對的にして特殊性を有する政策の間にも何等かの統一性と一貫的脈理との存在するものなきかを檢せんと欲する。換言すれば、特殊の中に尙一般性を求めんと欲する。マーシャルのモットーを借りれば *The one in the many (Industry and Trade に於ける標語)* が之である。此の點に於て筆者は、田邊元博士の立場を襲踏し、個性記述的な歴史科學の中にも、ある程度まで法則定立の餘地を認めんとする（註）。此の故に、本來特殊的なる政策に就ても、之を學問的見地より觀察する時、その史的展開

の間に何等かの統一的脈理の存在するものなきやと思ひを潜めるものなのである。

(註) 田邊元、科學概論(自然科學と文化科學の條參照)

五

上段科學と政策との對立を論じたる時、吾等は坂西氏の所説に觸るゝ機會を得た。右の論に於て氏は、嚴正なる學問的中立の立場を支持せられて經濟生活發達の道程を觀察論議せられたのであつた。私は今、坂西氏の所論の中より、二個の重要な核心を求め、之を中心としつゝ自家の見解を開き行かんと思ふ。その一は、社會進化の手段を個性の發達と見、而して此の個性が全能力を發揮するために分化と平準化の二作用が交互的に行はれ來たつたとなす見解である。換言すれば、社會の進化は、分化と平準化との交互的作用によつて行はれ來たつたものであり、將來に於ても亦社會進化が實現せらるゝためには必ずや此の二勢力の作用に俟たねばならぬとの見解である。その二は、社會上の問題に就き、濫りに主觀的な理想を掲げて論議することの不當を攻難せらるゝ點である。曰く「人類の社會は、さうして吾々の思想は、過去より將來に互り絶えざる連鎖を成して進化しつゝあるものである。昨日は今日を生み、今日は又明日を生む。併しながら、新たなる社會は

現在の社會より生るゝものであつて、決して突如として湧き出づるものでもなく、理想に依つて作らるゝものでもないのである」と（經濟生活の歴史的考察、七頁）。此の一節眞に坂西氏の立場を躍如たらしむるものがあり、學問研究者としての嚴肅なる態度に人をして襟を正さしむるの感がある。學的觀察に於て、各人個々の理想を掲げ、主觀によつて普遍を侵さんとするは正しからざる方法なること、従つて理想は新らたなる社會を作り出すものではないことは吾等も之を認めねばならぬ。然れども、學的觀察を離れて、實踐的なる政策自體として見れば、理想なくしては政策は成立するに由がない。學的觀察が重要なりと同一程度に於て、我々の刻々なる現實的生活の經營は重要なものであらねばならぬ。此の刻々なる現實生活の經營そのものは之は決して科學ではない。而も今日吾等は社會なる協同生活體を組織して生存する。従つて此の全體をなす生活體のより良き進行のためには、全體意志の意識的努力が必要となる。而も其處には必ずやより高遠にして、又より優位なる標幟が存在しなければならぬであらう。理想は新らたなる社會を作りだすものとして求めらるべきものではなくて、新らたなる社會への嚮導者としてのみ求められねばならぬものである。理想なき所には、吾等は生活夫れ自體の存在理由すら認め得ないであらう。

然らば、全體意志の歸趣としての理想は如何なるものなりや。上來論じたる所よりして、政策は

特殊なれば、具象的な普遍妥當の理想をもち來たることは不可能であり、若し之を求め行けば、左右田博士の内容制約を許さざる先天的規範まで溯らねばならぬことは檢し終へた。然乍、歴史的研究所の間より、社會進化の傾向を辿り、之を以て將來的政策の歸趣を律せんとすることは、筆者は必ずしも不可能とは信じない。此の點に於て筆者は、坂西氏所説の二核心中の前者に尠なからぬ暗字を見出すものなのである。

坂西氏の謂はるゝ分化と平準化の傾向は、之を換言すれば、平等化と不平等化の二傾向となし得るのであらう。而して、社會進化の流れに於ける平等化及び不平等化の交互的連鎖は、常に個人性の發達と解放と展開とを結果したのである。従つて、今若し個性の發達、解放、及び展開を名づくるに自由なる理念を以てするならば、社會進化の道程は、常に自由を顯現せしめんがための連鎖なりと云ひ得るであらう。かくて私に於ては、特定の時代に、特定の政策行はれたりとするも、之を社會進化の一連環として觀する時、究極に於て個性のより完全なる展開のための手段となつたものと考えらるゝのである。

斯く論ずればとて、筆者は、汎ゆる時代の政策は、夫々に個性のより、完き展開を意識的旗幟として、遂行せられ來つたと臆斷するものなりと誤解せられてはならぬ。固より或る時代に行はれたる

政策が、必ずしも其の當時に於て個性の展開を目標としなかつたことは之を認めねばならぬ。人も知る如くマーカンテイリズムの國家統制主義は國家を主とし個人を従とする專制的國家政策であつた。従つて、此の時代のみを他より切り離して考ふれば、其處では個性の展開が無慘にも蹂躪せられたるが如くに觀らるゝ。然れ共、一つの時代なり、一つの社會思想なりが有つ意味は、之を他と全く切斷して試験管内に投じ、そこに現はるゝ反應のみを検することによつて十分に捕捉し得るか。何びとも之を否定するであらう。一つの時代なり、一つの社會思想なりは、之に先立つものと、之に續けるものとを併せ考ふる時に始めて意義の全領域を把握することが出来る。コートニー (W. L. Courtney) 嘗てジョン・スチュアート・ミルの經濟學上の地位を評して曰く「ミルが持つ果續の價值は、彼に先立てるものと、彼に續けるものとに關連せしめてのみ理解することが出来る」と（註）。此の語は獨りミルのみならず、移して總べての場合に適用し得る態度ではないか。

されば、マーカンテイリズムに就ても、之を社會進化の一連鎖と見、一方に中世封建制度を置き、他方に時代の新らたなる風潮を置いて考ふれば、中世封建制度を脱して統一的近世國家を建設し、海外よりの富招來といふ當時の世界的風潮に立つて、一國の安全と繁榮とを圖らんがためには自ら國家的統制を必要とせられたのではないか。個人が未だ充分なる智能と自主力とを一般的に有

しない時代には、上よりの支配と指導とは必然必要となるのではないか。斯く觀察すれば、マーカ
ンテイリズムも亦、その後に来るべきより進歩せる時代への一つの梁橋であつたに過ぎぬ。従つて
又マーカンテイリズムと雖も、獨り個人の抑壓のみに終つたのではなくて、之によつて、個性が一
層よき展開に齎らさるべき契機となつたものである。

故に、政策を歴史的に展開し來る時、夫々の時代が意識したると否とに拘らず、事實として如何
なる跡を認め得るやといへば、それは常に、個性のより良き展開——即ち自由への道を辿りつゝあ
りと斷言することが出来る。此の點に、個性記述的な歴史科學——政策を對象とすれば、個別的
なる政策の間に尙一貫的脈理を認め得るとなすのである。

我等が高度の社會生活を營む時、意識的に社會を誘導せんとする一般的努力がなければならぬ。
之即ち政策である。而して、この政策が、將來の場合につき具象的に何なりやは、政策の相對性よ
りして何事も云ひ得ぬ。唯この場合に於ても過去の進化傾向よりして、將來的一般理想としては、
それは常に個性のより、完き展開にあらねばならぬとなすは、濫りに小主觀の理想を掲げて誤をなす
ものであらうか。

個性のより完き展開が何故に統一的脈理となるかと推論することは、遂に又先天的規範にまで至

らねば止り得ない問題である。吾等は唯、歴史的事實觀察の間に、右の如き統一を認め、而して内容制約を許さざる文化價值が、完踐的には必ず内容制約を必要とする時、その内容制約の規準として自由理念をもち來たらんとすに外ならない。

凡そ社會といふが如き有機的組織體を名づくるに全體の名を以てし、之を形成する個々人を名づくるに部分の名を以てすれば、其處に全體對部分の困難なる問題を發生する。然乍、今筆者が抱懷する所を直截に叙ぶれば、全體は究極に於て部分のために存在しなければならぬ。斯く言へばとて、全體の優位、支配力及び統制力を無視せんとするものではない。今日社會を營む個人は、社會なる全體を通しての個人である。従つて、全體を形成せる點に於て全體の支配を破る。然れども、全體の支配なるものは全體のための全體の支配のみに限らるゝとは云ひ得ない。かくては部分の存在は、何等の意義をもなく、單に全體のための一分子となり、夫々の個性は全く沒却せしめられ終るからである。かくては又人間生活そのものゝ意義すら認め得ざるに至るからである。全體の形成者たる部分のより良き展開にのみ全體の支配は存在理由を有つ。若しかくの如きを個人主義と稱すべくんば、筆者は敢て個人主義の名に甘んずるであらう。然乍、今日進みたる社會生活につきて、何等かの理想を示さんとする人々の間にも、自由への仰望は常に第一次的に認められる所である。

ギルド社會主義を主張するコール (G. D. H. Cole) も、その「ギルド社會主義再論」(Guild Socialism Re-stated, 1920) 第一章に於て、先づ自由に對する要求をかゝげてゐる。廣く社會主義者と云はるゝ人々も、必ずや自由への仰望を以て其の主張の根底となし居るのである。之は極めて興味深き事實と云はねばならぬ。今日の資本主義を齎すべき最初の信條とせられたるものは自由競争主義であつた。之が極端に走つて自由の本質を失ふに至り、資本主義への批評者として出現したる社會主義は又自由の主張を第一とする。この事實を以てするも、我等が政策の實踐的基調として、自由理念に其の統一を求め行かんとするは意味なき業ではないであらう。

去年、個性のより、高き展開——即ち自由理念を以て、政策實踐に於ける一般的統一脈理となすと雖も、筆者が之をば直ちに一般的文化價值の内容たらしめんとする獨斷をなすものなりとせられてはならぬ。唯、内容制約を必要とする現實政策に於て、或る程度の法則定立を求めんとすれば、個性の展開に之を求むるより外、私には途なしと云ふに過ぎぬ。故に一步を進むれば、個性の展開そのものは、人間生活の究極の理想そのものではなくて、それへの手段に外ならぬとも云はれねばならぬのである。但、具象的政策の統制者としては、之以上を求むることは全く不可能なりと現在の私は考ふるに過ぎぬ。此の實踐的統一脈理に導かれて顯現すべき政策自體の内容は、吾等の興り

知り得ざる所である。又個性の展開てふ統一的脈理の背後に、究極的理想そのものを求めんとすれば、それは左右田博士と共に先天的規範まで昇り行かねばならぬことであり、而してそれは遂に人間生存の理由といふが如き高さまで立ち至らねば止み得ぬ人生究極の問題であらう。

（註） W. L. Courtney: Life and Writings of John Stuart Mill, p. 95.